

イセエビ漁と海女小屋体験による都市・漁村交流活動

志摩の国漁業協同組合
和具青壮年部 東岡 保成

1. 地域の概要

私たちの住む志摩市は伊勢志摩国立公園内に位置し(図1)、リアス式海岸で有名な英虞湾を有し、北に伊勢湾、南に太平洋を望む自然豊かな地域である。所属する志摩の国漁業協同組合は、平成14年7月1日に志摩市内の18漁協が合併し発足した漁協であり、平成19年4月1日現在の組合員数は3,638人と三重県下で最大の規模を誇っている。

2. 漁業の概要

志摩の国漁業協同組合和具支所は、カツオ一本釣り漁業の他、刺網、一本釣、定置網、採貝など多種多様な漁業に加え、真珠養殖を主体にしている地区である。漁業者の高齢化や過疎化が著しく、魚価の低迷や原油価格の高騰とも相まって、漁業経営はますます厳しくなっている。一方で、平成14年度の広域漁協合併で集約的市場として和具市場が位置付けられており周辺地域における統合市場として漁村の活性化を担っている。

3. 研究グループの組織と運営

和具青壮年部は昭和54年に創部され、現在35人の構成員で日々の活動を行っている。平均年齢は45歳と比較的若い漁業者が多いことが部の特徴である。主な活動としては、イセエビの資源管理による漁場の保全、水産高校生との協働によるマダイ、トラフグ、ヒラメの稚魚放流や漁場調査の実施、さらには密漁・遭難時の緊急対応や海浜清掃などによる漁場管理に加え、地域住民との交流会を開催するなど地域に密着した活動を行っている。また、7年前からは青壮年部のホームページからイセエビの限定販売情報を発信し(図2)、遠くは北海道のお客さんから注文を頂いている。今年は開始20分足らずで事前に用意した100箱が完売するなど毎年、好評を博している。

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

和具青壮年部では、県の指導のもとに資源管理推進指針を作成し、網枚数や漁獲開始年齢の引き上げなどによる資源保護を行い、漁獲向上に向けての努力を行っている。

しかし、地区漁業を取り巻く現状は、他の漁村に漏れず、後継者や就業者不足に加え水産資源の減少もあいまって漁業の衰退が顕著になっており、県下でも比較的若い漁業者が多い当地区においてもこの問題の打開は非常に大きな課題としてのし掛かっている。

このような現状下において、地元の小学生でさえイセエビの獲り方や漁業者の事を全く知らないという現実が見えてきた。そのため、自分たちの資源保護に対する取組の一環として、イセエビ資源を活用したなんらかの教育活動が展開できれば、資源保全の促進に加えて、後継者不足や資源不足の打開策が見つかるのではないかと考えた。

そこで、平成13年度に三重ブランド第1号として認定を受け、全国でも有数の水揚げを

誇る和具のイセエビを通じて水産業への理解を深めてもらう目的で資源管理啓発体験学習を企画した。

この体験学習は、漁村・漁業への理解を深めてもらうとともに、食材の持つ本来の旨さや漁業者とのふれあいの中で水産資源・漁場環境の保護を呼びかける啓発活動を通して、地域の活性化につなげていくことを目的としており、同様の問題を抱えながらこのような取組を開催している地域の手助けになればと考えて当課題を選定した。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

この取組は平成15年から開始し、今年で5年目を迎えたが、開催当初は地元の小学生を対象に実施していた。が、地区外の子供達にも体験させてあげたいという意見が部員の中から出たため、平成17年からはその参集範囲を県内の小学校に拡大し参加学校を募り、出来るだけ多くの子供達が参加できるようにするとともに、子供達の漁業に対する意識を深めるために、あえて漁期序盤の好漁期を取組期間に充て、保護区内で操業を行う事で、多くのイセエビを見てもらい、資源の大切さを知ってもらおうと内容を充実させた。

また、和具地区のもう一つの主漁業である海女漁業への理解を深めてもらうために婦人部の協力のもと、海女小屋の見学や海女漁業での現場の実情や苦勞に関する話を聞いてもらい、漁業が成立していくために必要な水産資源・漁場環境の保護を呼びかける活動を実践している。

過去の体験漁業には、これまでに12地域20小学校から1,102名の参加があった(図3)。その参加範囲は、地元の小学校を含め山間部や伊勢湾沿岸の小学校までとたきに亘っている。

平成19年度活動については、次のとおりである。

まず、イセエビ漁体験であるが、参加した子供達はこの活動の目的や乗船時の注意事項等の説明を受けた後、青年部が実際に漁に使用している4隻のイセエビ刺網漁船に乗り込み、前日に予め網を仕掛けておいた漁場に移動した。残念ながら開催初日は低気圧の接近で天候が悪く波も高かったため子供達に網揚げを体験させることは危険であると判断し体験は見送り、漁業者の作業を船上で見守った。残りの3日間は天気にも恵まれ、参加した子供達も漁業者と一緒にイセエビがたくさん掛かった刺網を実際に回収し、貴重な体験をしてもらった。

子供達にとって網揚げを自らの手で行うことは生まれて初めての体験であり、恐る恐る網を手に取りながらもラインホーラーで巻き上げる網に最初のイセエビが姿を表すと、興奮を抑えきれないのか船上では喝采が起こった。多くの子供はイセエビを間近で見るとも触ることも初めての体験であり、日常の生活の中ではなかなか目にすることのないイセエビを手にとって大はしゃぎであった(図4)。

網さばき体験では、漁船から回収した刺網を網さばき場まで移動させ、そこで漁業者や婦人部の方達から漁獲物の外し方や網から外す際にイセエビに傷が入ると商品価値が下がるといった説明を受けた後に、木製の引っ掛け道具を使って網に絡まった漁獲物を外す体験をしてもらった。

最初はイセエビの触覚や殻に網が複雑に絡んで、イセエビを上手く外すことが出来なかった子供達も、手早く外せるようになり、中にはイセエビを触ることさえ怖がっていた子供もいたが、次第に慣れて外したエビを誇らしげに手にするようになった(図5)。

また、イセエビ以外にもカワハギやサザエといったものも漁獲されており、分別してカゴに収めた。

漁獲物を網から外した後は、全員で網に掛かったゴミの回収を行った。大半は海藻類であったが、ビニール類やひも類といった陸から捨てられたと思われるゴミも掛かっており、子供達にとっては自分達の捨てたゴミが海に流れ着いて漁業に悪影響を与えているという現実が意外だったようであった。

地区漁業についての講義では、資料を使って和具地区で営まれている漁業を中心に、水揚げされる魚介類の紹介や資源管理への取組についての講義を行った。参加した小学校が山間部にあることもあってか、漁業の方法や実際に獲れる魚を見て、とても興味深く真剣に耳を傾けていた。講義終了後に質問時間を取ったが、たくさんの子供達から漁業に関する質問が多く寄せられたが、中には「漁師はもてますか?」、「イセエビの名前の由来は?」といった回答に困るような質問も出た(図6)。

海女小屋見学と海女漁業についての講義では、市場横に位置する海女小屋で実際に暖を取っている海女さんを囲んで、アワビの話や海女漁の苦労話を聞いてもらった。

まず、海女さんからアワビ漁をする時の潜り方や使う道具について、実物を使った説明があり、地区漁業の学習時と同様に子供達からは、海女漁業に関する多くの質問が寄せられた(図7)。

イセエビ汁の試食と市場見学では、婦人部の皆さんの協力のもとイセエビとアオサのみそ汁を作って子供達に食べてもらった。大鍋を使って大量のイセエビを煮込んだみそ汁には旨みが溢れ出しており、何回もお代わりをする子供達もいて大盛況であった。

昼食後には、和具市場内の水槽に入っていたカンパチやマダイなどの活魚の見学を実施した。

6. 波及効果

自分達の漁業に対する励ましの言葉がたくさん書かれた感想文が後日、子供達から届いた(図8)。感想には、この体験を通じて漁業への興味だけではなく、大変さや厳しさについての理解を深めてくれたことについての記述が多く書かれており、今後も漁村交流を活発に行っていくことで、資源保全の推進や水産物の素晴らしさを多くの子供達に知ってもらえると実感した。

また、青壮年部の皆も毎年この活動を楽しみにしており、都市部の人たちとの交流を促進することで、漁業の素晴らしさを再認識してもらうのによい機会と捉え、次年度以降も積極的に活動を行っていきたいと考えている。

7. 今後の課題や計画と問題点

漁業体験は、本業である漁業の兼ね合いから解禁日に当たる10月1日からの2週間程度に限定されることや、保護区での操業を行うことで資源管理上他の漁業者との出漁規制等の調整が必要であるため、体験期間と資源管理の調和を図り、他の漁業者の理解を得られるように活動を充実させていきたいと考えている。

また、参加する小学校がこの取組に非常に魅了されて次年度への参加も予約していくことから、参加学校数が制限されてしまうことに加え、上述のとおり操業日程の関係上長期

間に渡る開催ができないため、参加学校の調整を行うとともに、教育委員会等への働きかけを行い出来るだけ多くの小学校を受け入れたいと考えている。

さらに、材料費や近年の燃料費の高騰により、運営経費がかなり嵩んできており、費用捻出が困難な状況である。本年度については三重県を通じて海づくり協会からの助成金を活用して活動を行ったが、次年度以降はイセエビ以外の漁獲物のインターネットによる情報発信を行うとともに、県や志摩市に働きかけを行い費用の捻出を図るとともに、運営経費の削減を図ることで今年以上の活動を行えるようサービスの向上と広報に努めたいと考えている。

後継者や就業者の受け入れ体制についても早急に確立し、併せて三重ブランドとして認定されているイセエビの商標登録を、漁村の慢性的な課題である後継者や就業者不足への対応策のひとつとして位置付けて検討を進めている。

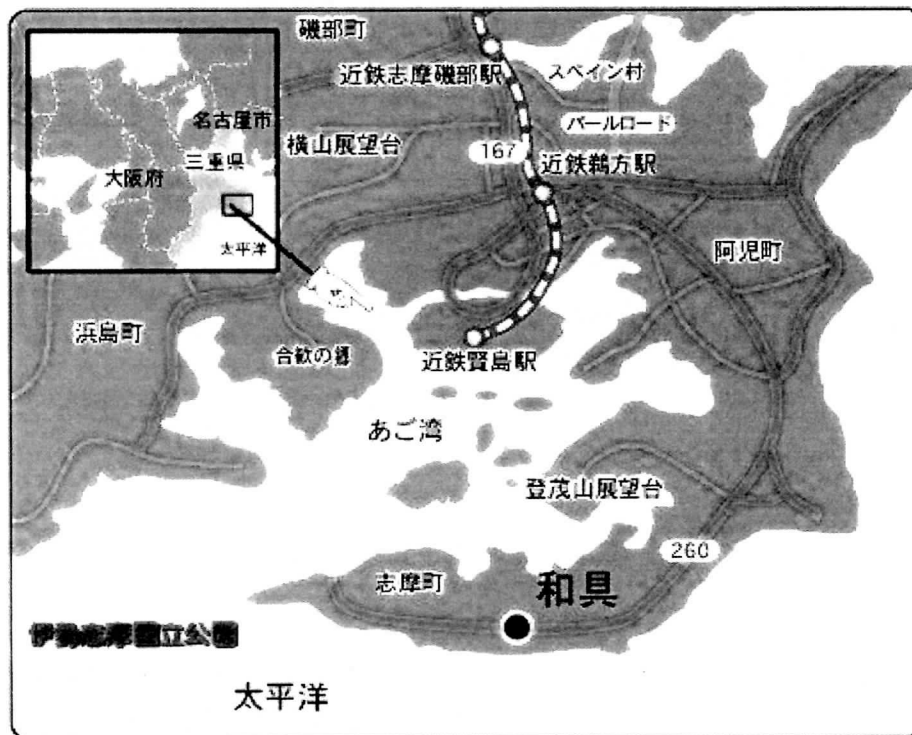


図1 志摩市及び志摩の国漁業協同組合和具支所 位置図

年度	地域	小学校名	参加人数内訳(名)		
			生徒	先生	計
H17	多気他3地域	相可小学校他7小学校	407	32	439
H18	伊賀他4地域	府中小学校他6小学校	359	21	380
H19	伊賀他2地域	青山小学校他4小学校	263	20	283
計			1,029	73	1,102

*H15,16は地元小学校を対象に開催

図3 イセエビ体験学習参加学校数の推移



図4 船上での子供達



図5 網さばき体験をする子供達



図6 講義を受ける子供達



図7 海女小屋体験をする子供達

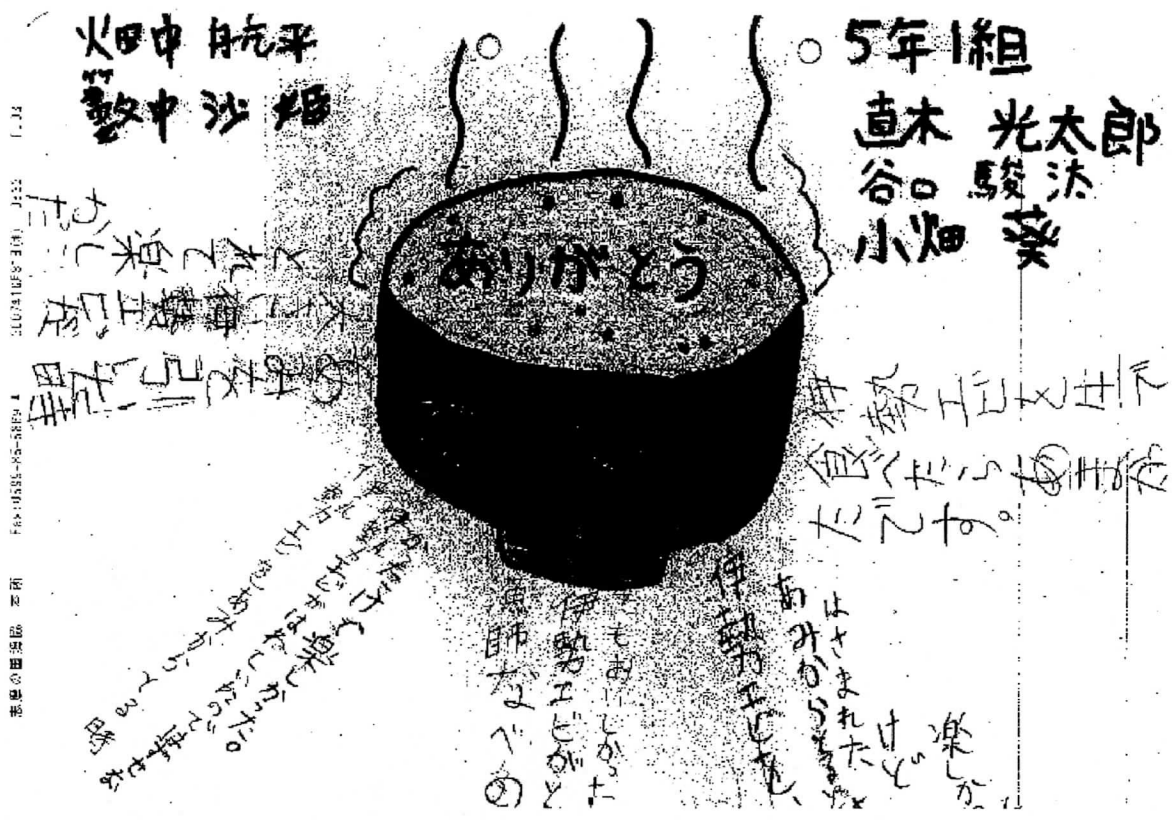


図8 子供達からの感想文